慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	K. マルクスにおける2つのアソシエーション(上) : ある19世紀人の概念と軌跡
Sub Title	On the two specific differences of the concept 'association' in the case of K. Marx
Author	道盛, 誠一
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1981
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.74, No.3 (1981. 6) ,p.215(17)- 230(32)
JaLC DOI	10.14991/001.19810601-0017
Abstract	
Notes	論説 正誤表あり
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19810601-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

K. マルクスにおける2つのアソシエーション（上）

——ある19世紀人の概念と軌跡——

道盛　誠一

第1節　アソシエーションと若きマルクス
1）アソシエーショニスト・マルクスとは——序にかえて
2）「初期マルクス」とアソシエーション概念
3）『共産党宣言』へ
第2節　資本制生産様式止揚の構想へ——労働者アソシエーションの再認識
1）1850年代における経済学研究とアソシエーション概念　（以上本号）
2）マルクスの労働者アソシエーション展望　（以下次号）
第3節　資本制生産様式の止揚と究極にまで発達した資本形態——資本のアソシエーション＝株式会社
1）マルクスと株式会社
2）資本のアソシエーション
3）資本のアソシエーションと労働のアソシエーション——結語にかえて

「資本制株式企業も，協働組合工場と同様に，資本制生産様式から協同連合的生産様式（associrte Productionsweise）への過渡形態として見られるべきである。しかし，ただ，前者では対立（資本と労働との対立……引用者）が消極的に，後者においては積極的に止揚されているのである。」　Mskr.[1] S. 327

第1節　アソシエーションと若きマルクス

1）アソシエーショニスト・マルクスとは——序にかえて

アソシエーションという概念は，なじみ深くも，なかなかに不分明な概念である。というのは，それがきわめて抽象的な操作の歴史をもっているからにほかならない。アソシエーションとは，特定の内実を有したある特殊な制度を一義的に示す概念ではなかった。たしかに，19世紀の労働者諸組織は，当事者たちや同時代人によってアソシエーションと呼び慣わされてはいた。とはいえ，そ

注（1）Marx Engels Werke, Bd. 25 S. 456（以下，Werke と略す。）本論文では，佐藤金三郎横浜国立大学教授の御厚意により提供をうけた『資本論』1865年草稿の写しを利用した（以下，Mskr. と略し，草稿ページを記す）。ここに記して厚く御礼申し上げたい。

れらは局地的なコミューンであったり，労働組合であったり，また協働組合(Co-operative Societies)等々であった。それらは，様々の組織原理，相異なった行動様式を採っていたのである。

古来，われわれの先人たちは，未来社会を構想する何がしかの試みを数限りなく繰り返してきた。こと西欧に限定しても，キリスト教的伝統，とりわけ「異端」諸派の千年王国待望論とその運動を挙げるまでもなく，その例は枚挙にいとまない。その歴史において，なかでも19世紀はその精華を示したといって過言ではない。無量大数のフランス・ソーシャリストを想起すればよい。

さて，未来社会を想い描こうとした人々は，様々に想いをこめてアソシエーションを唱えてきた。こうしたアソシエーションは，封建制度か自由主義制か，あるいは資本制か社会主義制か，といった単に体制の如何を問う概念ではなかった。新たなる個と個の共同性を模索して，逃避に動機づけられたにせよ，ユートピアの再生をめざすにせよ，世俗界あるいは精神界の権威・権力にたいしてしばしば激越な戦いを挑んできたのである。

個と個の切り結ぶ関係は個から自立して，一人歩きをしてきた。個と個の切り結ぶ関係という社会の本質が見えなくなる，もしくは個人の視界の外に属するようになり，権力，権力機構，国家が個の共同性を一身に表現するようになったのである。それ以来，様々にユートピアを構想したり，その実現をめざした諸運動が存在してきた。個と個の結びつき方，結びつく回路のあり方を問うこうした潮流は，人間の相互関係行為が共通ターム・媒介物（貨幣）によって専ら計られるようになるにつれて，したがって生産物が質よりも量によって評価づけられるようになるにつれて，多様な思想で織り合わされるようになった。かくして，社会の価値観が経済的なそれと大きく重なるようになればなるほど，それだけに他方では経済学的な考察をぬきにしては新たなる社会編成の原理を展望するいかなる試みも「ドン・キホーテ的愚行」に堕するほかないのであった。

いったい19世紀人たちは，どのような選択をし，どのようなシステムを採ろうとしていたのか。彼ら，彼女らの生産・生活システムの中では，人々は相互関係行為において主体たりえて，疎外されない労働を，疎外されない日常生活を定式化し，実現しえたのであろうか。この問題への詳細な立ち入りは，稿を改めておこなうこととして，本稿では次の問題に焦点を合わせることとしよう。すなわち，これら様々の試みを同時代人マルクスがどのように感じとり，彼の仕事の中でどのように扱っているか，という点である。(*)

19世紀人 K. マルクス，それはただ単に19世紀に生きたというにとどまらない。彼もまた現実世界を批判しつつ，未来社会——来るべき新しい社会——を描こうとしつづけたアソシエーショニストだったからである。(2) しかし，はたしてマルクスは，あのアソシエーショニストたちの限界を超克

（*） 32ページの補注を見よ。

注(2) マルクスのアソシエーションをめぐって暗中模索していた数年前の私を力付けたのは，田中清介氏の一連の論文であった。ここでは，とくに「マルクスにおける Assoziation の概念について」（『社会学評論』71号）を挙げておきたい。

してなんらかの未来展望を披歴しえたのであろうか。端的にいえば，彼もまたアソシエーションの定式化をおこなっていない。それは他のアソシエーショニストと同様におこないえなかったのであろうか。おこなわれねばならないという問題意識をも欠いていたのであろうか。こうした疑問に直接の回答を与えることはできない。しかし，マルクスが他のアソシエーショニストたちと異なる点はほかならずここにこそ関わっている。なぜならば，マルクス自身が投げかけた非難，すなわち将来社会を詳細に記述しようという試みは，現実に何ら基礎をもたない観念論に堕しかねないし，事実そのとおりである，という非難が彼自身をも拘束したからである。彼は将来社会の（ための）現実的基礎を自己了解できぬかぎり，将来社会を直接に論じようとはしなかった。現実の運動のなかで新しい社会への芽が培われていくこと，またそれを抽出することをもって，彼の作業の第一義としたのである。にもかかわらず，他方では，マルクスは，少なからぬ文言のなかに彼のビジョンを吐露しているのである。彼の示唆するところを追跡しておくことは多くのヒントをわれわれに与えてくれる。そして，こうした追跡作業の中で浮び上ってくる概念の一つとして，アソシエーション（Association）がある。

『資本論』期のマルクスは，アソシエーション範疇を我が物として用いている。この範疇を用いた表現は，私的所有の止揚された社会，疎外なき社会，つまり，到来すべき社会を射程においた文脈に限って登場するのである。とりわけパリ・ブリュッセル時代に，急進社会主義者たちと大いに交流していたマルクスの過去を引き合いにだすまでもないだろう。彼はどのように将来社会を構想し，それをどのような概念で，またどんな範疇を用いて表現していたか。それは，19世紀のユートピア・ソーシャリストの営為と，彼ら，彼女らのアソシエーションを念頭におかねば了解不可能である。この意味で，マルクスの将来社会把握を彼のアソシエーション概念と呼ぼう。

若き日のマルクスは，様々の範疇を用いることによって，彼のアソシエーション概念を表現している。初期マルクスは同時代の共産主義や社会主義に批判的な態度をとりつづけた。そのおりに，彼が上記文脈と同じ件りで用いた範疇は Association ではない。彼は敢えて Verein, Vereinigung などを用いて表現した。しかし，この事実とてもアソシエーショニスト・マルクスを否定するものではない。マルクスは同時代の共産主義者，社会主義者の観念性と近視眼的性格を批判しつづけていたので，彼らの振り回す Association 範疇を直接に自らの概念範疇として採用することを拒否したのであった。

ソーシャリズムの高揚につつまれたパリに滞在するマルクスにとって，アソシエーションは耳慣れた概念であった。それはきわめて抽象的な概念としてのそれであったろうし，また現実に労働者たちの実験を表示するものでもあったろう。事実，若き日の彼がのこした文書にアソシエーション範疇を見いだすことも可能ではある。

以上の諸点をふまえて，彼ののこした諸文書から，アソシエーショニスト・マルクスの軌跡をた

どってみることとしよう。

2）「初期マルクス」とアソシエーション概念

1844年，マルクスは草稿（通例「経済学・哲学草稿」と呼ばれる）の土地所有に関説する件りで，

「土地や地所に適用される協働組合（Assoziation）[3]は，国民経済学的観点での大土地所有の有利さを併せもち，かつまた，はじめて分割（土地所有の分割……引用者）の本来の意図である平等を実現する。同様に，この組合は理性的なやり方で，しかももはや農奴制や支配やばかげた神秘説に媒介されないやり方で，土地にたいする人間の人情的な関係をつくる。というのは，土地が営利の対象でなくなって，自由な労働と自由な享受とを通じて再び人間の真の人格的な財産となるからである[4]」

と述べている。この引用箇所は，私的所有の止揚を念頭におきつつ，現実の土地協働組合を論評した文脈と考えられる。だが，ここに登場するアソシエーションは，現実の具体的組織（の企て）である協働組合に与えられた一般的な呼称を借りてきたものにすぎない[5]。この時期に，彼が未来社会を透視しようとする際に用いたのは，Vereinや，仲間と結びあう社会的関係という意味でのGesellschaft であり，動詞形では vereinen であった。

彼は，様々なテーマ設定のもとで，「私的所有の積極的止揚」とは人間存在にとってどういう状況を意味することになるのか，意味すべきであるか，と問いつづけている。私的所有が積極的に止揚されたときの人間を評して，様々に表現をおこなう。「全体的人間（totaler Mensch）」然り，「人間的（menschlich）」然り，「ゆたかな人間（reiche Mensch）」然り，そして「人間的な生命発現の総体を必要としている人間」然りというぐあいである。しかしこれらの概念の内包するものを，なかなかマルクスはかみくだいて教えてはくれない。彼自身，自らの思索のほどを表現しきろうとして苦闘していたのである。

「粗野な共産主義」（バブーフ派のことであろう）を念頭におきつつ，「私的所有の思想を止揚するためには，頭の中の共産主義でまったく十分である。現実の私的所有を止揚するためには現実の共産主義活動を欠かすことはできない[6]」と語る彼であった。しかし同時にまた別のところで彼自身の思

注（3） 現在のドイツ語では Assoziation と綴るが，マルクスの時代の綴りは Association である。つまり，英語，フランス語のそれと同一綴りである。本文中では Association，アソシエーションと記す。ただし，引用文中においては，草稿写しを利用する場合を除いて，マルクス・エンゲルス全集（Werke）にしたがって，Assoziation と記すこととした。

（4） Werke, Ergsbd. I, SS. 508.

（5） そのモデルは，1842年4月のチャーチスト国民会議で提案されたオコーナー（O'Conor, F）決議にあるものと推定される。それは国内植民計画であった。1843年のオコーナー自身による労働者への呼びかけを出発点として，一連のアピールが「ノーザン・スター」紙に掲載される。同計画は3年後に，チャーチスト協働土地組合の発足というかたちで結実する。ちなみに，具体的な土地計画は，7万人のメンバーを擁する全国土地会社として1846年に実行されるに至る。

（6） Werke, Ergsbd. I, S. 553 傍点は，マルクスによるアンダー・ライン部分である。以下，同様である。

索の背景・源泉を表白してくれる。それは，彼のもとめつづけた私的所有止揚の具体的イメージであった。すなわち，

「共産主義的な職工たちが団結する（vereinen）とき，彼らにとってさしあたりの目的となるのは教説，宣伝などである。だが同時に彼らは，それらを通じて新しい欲求を，社会的関係(Gesellschaft) の欲求を我が物とする。……社会主義的なフランスの労働者たちが連合している（vereinigt）のをみるならば，こうした実践的運動がそのもっとも輝かしい成果において観察できるのである。煙草をすい，酒を飲み，食事をすることなどは，もはや結合の手段もしくは結合させる手段として存在してはいない。社会的結合（Gesellschaft），連合体（Verein），そして重ねて社会的結合を目的とした団欒を，労働者たちは十分にもっているのだ。人間の親密さは空文句ではなくて真実であり，人間性の気高さが労働者によってきたえられた人々からわれわれに向って光を放っている。」(7)

こうしたフランスの労働者たちの結びあっている関係，日常生活（の一部）を見聞して，マルクスは興奮とカルチャー・ショックに似た感動を覚えたに相違ない。「われわれに向って光を放っている」という文言には，その思いが溢れでているではないか。

この時期の彼は，こうした世界をアソシエーションと呼ぶことに踏みきっていない。彼は彼なりに表現すべく，彼の駆使できる範疇を用いようと努める。当時の彼にとってアソシエーションとは，フランスにおける労働者的運動のもつ小市民的急進主義性，粗野な共産主義的体臭が強すぎる範疇だったのである。彼のこうしたこだわりはさらに持続する。

「経済学・哲学草稿」では，Verein および労働者の欲求する共同的関係という意味での Gesellschaft が，マルクス流のアソシエーション概念として登場していた。ブリュッセル時代の「ドイツ・イデオロギー草稿」(8)でも同様の用法を認めることができる。「同様の」とは，アソシエーション範疇を使用することへのマルクスの反発という点においてである。

さて，マルクスのアソシエーション概念を構成していた動詞形の vereinen の用法は，「ドイツ・イデオロギー草稿」でも同じである。また，同草稿ではアソシエーション概念として vereinen のほかに同系の Vereinigung および動詞形の vereinigen が多用されている。これらの範疇は，Vereinigung を除けば，以後ほぼ一貫して Association (Assoziation) および associeren (assoziieren) と代替的に用いつづけられる重要な範疇である。

注(7) Werke, Ergsbd. I, S. 553.

(8) 草稿「ドイツ・イデオロギー」は，1845年11月と1846年8月のあいだに執筆された。それは，マルクスとエンゲルスの協働の産物であるが，いわゆる持分問題の論議は留保しておきたい。この草稿から私の引用する諸文言の多くが，いずれの発想によるものか判断できかねるからである。なお，引用は，広松渉編の河出書房新社版（Hiromatsu, W. hrsg., Die Deutsche Ideologie; Neuveröffentlichung mit Text-kritischen Anmerkungen, 1974）に拠った。以後，広松版と略称して引用をおこなう。

まず，「ドイツ・イデオロギー」執筆者たちのアソシエーション概念の暗示部は，中世自治都市，ツンフトに結集する手工業労働者たちにある。これには，「真の連合（Verein）[9]」という表現が与えられている。この Verein という範疇は，封建制の支配下での結合関係に与えられた Verband範疇と対立的に用いられる。諸都市の市民たちは身をまもるために，土地貴族に対抗して団結をかためる。そうした諸市民や諸都市の団結にたいして，「ドイツ・イデオロギー」執筆者は，Vereinそして Vereinigung の範疇を用いた。さらに，執筆者によって抹消された箇所には，「近隣諸都市の協同連合（Vereinigung）」とあるが，この Vereinigung は最初に書かれていた Associat〔ion〕を修正したものである。[10] 思わず Association と書いたものの，後刻，自らの範疇である Vereinigung に置きかえずにはいられなかったのではなかろうか。

こうした文言は，私的所有の止揚を直接に論じた文脈ではなくて，それ以前のところ，つまり歴史と現実との鳥瞰を通じて得た将来社会イメージを暗示する文脈の中にある。他方，私的所有の止揚という事態において実現さるべき関係性を Gemeinschaft と表現する箇所には，次のような文言がある。

「分業による人間の諸力（諸関係）の物的諸力への転化は，人がそれについての一般的な観念を頭から追い払ったからといって止揚できるものではない。そうではなくて，諸個人がこの物的諸力を再び自らの支配下において分業を止揚するのでなければ止揚されえない。これは共同関係（Gemeinschaft）なくしてはありえない。共同関係（Gemeinschaft）のなかではじめて，各個人にとって，自分の素質をあらゆる側面で鍛える手段が実存する。共同関係（Gemeinschaft）のなかで，はじめて人格的自由も可能となるのだ。……従来諸個人がそこへと結集していた見せかけの共同社会は，常に諸個人に逆らって一人歩きしていた。……真の共同社会（wirkliche Gemeinschaft）のなかでは，諸個人は，諸個人の協同連合（Assoziation）のなかで，かつまた協同連合によって，同時に自由を獲得する。[11]」

ここでは，将来社会での諸個人の関係概念としてアソシエーション範疇が用いられている。同趣旨の別の文脈[12]では，Vereinigung が登場するが，いずれの範疇にせよ，アソシエーション概念としての初登場である。こうした将来社会に「個人として」参加する諸個人は，「連合した諸個人」，「自由に連合した諸個人」と表現されている。この「連合する」が vereinigen である。物的諸力の諸個人による再支配といった命題設定については，後論の生産協働組合評価とのかかわりが意識さるべきであろう。しかし，後節で述べることだが，この時期のマルクスは，実在する諸運動にたい

注(9) 広松版 S. 92.
(10) 広松版 S. 116.
(11) 広松版 S. 118-120. なお，マルクスもしくはエンゲルスによって抹消されている部分については引用を省略した。
(12) 広松版 S. 126.

してはきわめて冷淡であった。上記の命題は観念的な，即自的な問題把握であって，それ以上のものではなかったといえる。諸個人の連合とはどのような内実をもったものか，また自由に連合するとは具体的にどのような関係行為なのか。さらに，そうした関係行為の結果えられる共同性とは，管理・被管理の中にとりこまれたものでよいのかどうか。現実にある運動のどのような点に，それらの問題にたいする解答のためのヒントを見いだすことができるのか。これらの諸々の問いに答える内容的な記述があるわけではない。

ところで，Association 範疇をわがものとして用いるマルクスへの転換点として，「ドイツ・イデオロギー」を位置づけることには躊躇せざるをえない。第一には，同草稿はエンゲルスとの協同作業であることがかかわっている。当時エンゲルスはフランスやイギリスの協働組合運動に大いに傾倒していた。ことにオーウェンに傾倒しており，「ニュー・モラル・ワールド」紙に寄稿をつづけるほどであった。マルクスが示すほどには，アソシエーション範疇の採用をためらわなかったのではなかろうか。第二に，マルクスは，同時代の共産主義的運動に対峙する緊張感（共産主義者と自認するに至る道程を想起せよ）の中で，自らの共産主義像をつきつめようとしていた。エンゲルスの牧歌的な将来像――「朝には狩りを，昼には魚をとり，夕べには家畜の世話をする」――にたいして，「夕食後に批判をする」「批判的批判家」を書き込む彼であった。(13) なるほど当時のマルクスは依然として批判的批判家としてアソシエーショニストであった。彼の将来社会ヴィジョンを模索する作業は，同時代の共産主義にたいして批判的立場をとりつづけることに支えられたもの，いわば受動的ともいえる作業だったといえよう。前の牧歌的未来像批判を含むパラグラフにたいする欄外書き込みの中で，マルクスは「経済学・哲学草稿」以来の文言を書きつけている。

「共産主義とは，再建さるべき状態ではないし，現実がめざすべき理想といったものでもない。現状を止揚する現実の運動が共産主義とよばれる。この運動の諸条件は，現に存在する前提から生ずるのだ。(14)」

『哲学の貧困』（1847年）の中でも，プルードンのアソシエーション概念をとりあげて，

「……社会（société）とか連合（association）とかいうことばは，すべての社会に，封建制にも，競争に立脚する連合であるところの市民社会にも，与えることのできる名称である。どうして，連合ということばだけで，競争を打破しうると考える社会主義者たちがありうるのだろうか。(15)」

と論評している。過去・現在の労働者的諸運動への執拗なばかりに痛烈な，しかし彼自身にとって

注(13) 広松版 S. 34. 望月清司『マルクス歴史理論の研究』（岩波書店，1973年）p. 211-216 を参照されたい。

(14) 広松版 S. 37.

(15) Werke, Bd.4, S. 161 ところで，マルクスの最大の論敵の一人にして，したがって彼に最も強い影響を与えた同時代人の一人であるプルードン。このプルードンは，過去および同時代のアソシエーショニストたちを批判するあまり，後日には，アソシアシオン範疇を自らの範疇として用いることを単純に拒否した。彼は，別の範疇 Fédération を提唱する。しかし，マルクスはプルードンの道をとらなかった。

は切実な批判であり，自問であった。

3) 『共産党宣言』へ

マルクスは，当時の代表的な社会主義運動の諸派（たとえば，オーウェン派やフーリエ派など）を非難しつづける——彼らは，資本と労働とのあいだの関係を，市民および金持の博愛心に訴えて，調停しようとするまったく笑うべき者どもだ，と。マルクスが維持するこうした姿勢は，よくよく了解しておかねばならないが，同時に次の点も重要である。

すなわち，1847年末に執筆された「労働賃金」[16]の表題をもつ草稿には，労働者諸組織すなわち労働者諸組合を扱った一節があり，また，全く同じ時期に執筆された『共産党宣言』[17]では，未来展望の下に労働者相互の関係性を論じて，はじめて associerte Arbeitern を用い，かつまた将来社会を表現して Association を用いている。

まず，「労働賃金」草稿の第7節「労働者諸組合（Arbeiterassoziationen）」論は，その表題が示すごとく，現実の労働者組織に関説したものである。そこにマルクスの将来展望的な文言がでてくるわけではない。いわゆる国民経済学者による反労働者組織キャンペーンにコメントを加える程度のものである。ただ，マルクスはその中で，「労働者諸組合（Assoziationen）は，競争を止揚し，その代りに労働者間の連合（Vereinigung）を定立するという目的をもっている」[18]として，「政治的および産業諸組合」を論じている。

「労働者諸組合は，労働者階級の連合（Vereinigung）の手段であり，階級対立をともなう旧来の全社会を崩壊させる準備手段である。」[19]

このようにここに登場している Association 範疇は，現実の労働者諸組織——労働組合もしくは協働組合そのものに他ならない。マルクス独自のアソシエーション概念として用いられているのは，Vereinigung 範疇である。引用例にみる Association は，それを現実化するための手段をさしているのであって，それそのものを概念する範疇ではない。

しかし，『共産党宣言』のなかで，「全生産様式の変革」のための諸プログラムを提示したのち，総括してマルクスのいわく，[20]

「発展するにしたがって，階級差別が消滅し，全生産が協同連合した諸個人（assoziierten Individuen）の手に集中されれば，公権力は政治的性格を喪失する。……

注(16) Werke, Bd. 6, S. 535-555.

(17) 『共産党宣言』には，マルクスおよびエンゲルス両人が執筆者として挙げられている。しかし，実際にはマルクスが苦闘の末に書きあげたものである。エンゲルス自身も，本質的にはマルクスの著作であり，その根本思想は専らマルクスひとりのものだ，と述べている。したがって，本論文では，マルクスの著作物とほぼ同等の扱いをする。

(18) Werke, Bd. 6, S. 554.

(19) Werke, Bd. 6, S. 555.

(20) 注（17）を参照せよ。

K. マルクスにおける2つのアソシエーション（上）

諸階級と階級対立をともなう旧来の市民社会に代って，協同連合社会（Assoziation）が登場する。そこでは，各人の自由な発展が，万人の自由な発展のための条件である。」[21]

未来的展望のもとに労働者相互の関係性を表わす動詞形の用語として，はじめて associeren を用い，かつまた，「市民社会」に代るものを表現して Association と書きつけている。

当時のマルクスは，共産主義者同盟，さらに民主主義協会で意気軒昂の活躍をしていた。彼自身の革命意識の高揚と流動化する情勢こそが，彼をして己がアソシエシーョン概念としてAssociation範疇を登用せしめたのであろうか。

だが，折りも折り，1847年～48年の経済恐慌は政治的危機に移行し，この『共産党宣言』の印刷が終らぬうちに革命が始まった。それは1848年から翌年にかけて全ヨーロッパを席捲したのである。マルクスは，その渦の中，革命のための論陣を張りつづける。だが，拠点たる「新ライン新聞」も弾圧のために解散の止むなきにいたった。彼は，生活の場と糧をうるための仕事をもとめて，しかし一時しのぎのつもりでロンドンに旅立った。

第2節　資本制生産様式止揚の構想へ
——労働者アソシエーションの再認識——

1）1850年代における経済学研究とアソシエーション概念

全大陸を興奮の渦の中に巻きこんだ革命運動を回顧して，マルクスは月刊誌「新ライン新聞・政治経済評論誌」に一評論をよせている。2月革命に跳梁したさまざまの社会主義と，臨時政府下の諸政策（「国家の授助による協働組合」たる国立作業場の設立など）を批判して彼はいう，

「運動の総体をその一契機に従属させ，共同的社会的生産の替りに個々の衒学者の思索に任せ，そしてとりわけ，諸階級の革命闘争とそれにともなう不可避の事柄とをちゃちな手品や大げさな感傷によって空想的に調停するユートピア，空論的社会主義。根本的に現在の社会を理想化し，夢想郷を描いてみせ，社会の現実にたいして己が理想を貫ぬこうとする空論的社会主義——この空論的社会主義は，プロレタリアートから小市民に譲渡される。」[22]

さらに，「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」においては，パリ6月暴動後のプロレタリアが弱体化していることを把えて，

「プロレタリアートの一部は，交換銀行や労働者協働組合といった空論的な実験に熱中している。旧来の世界自体が有する巨大な手段すべてを用いてこの世界を変革することをやめて，むしろ社会のかげで，個人的に，プロレタリアートの限定された生活条件のなかで，プロレタリアートの

注(21)　Werke, Bd. 4, S. 482.
(22)　「フランスにおける階級闘争——1848年から1850年まで」（1850年執筆）Werke, Bd.7, S. 89-90.

救済を遂行しようとする運動，したがって必ず失敗するにきまっている運動に熱中している」[23]

（下線は引用者）

と手厳しく論評している。現実の労働者アソシエーションにたいする批判は，依然として手心を加えることを知らない。

ロンドン時代の初期にかんするかぎりでは，彼の将来社会ビジョンにかかわる発言および論述をひろうことはできない[24]。『資本論』諸草稿の基礎がこの50年代における経済学研究とジャーナリスト活動のための情報蓄積に求められることは，周知のとおりである。だが，少なくとも文献上は，われわれが彼独自のアソシエーション関連の論述に再度めぐりあえるのは，「経済学批判要綱」として知られる草稿においてである。

これまでマルクスのアソシエーション概念において表明されてきたのは，個と個の関係行為の形態そのものにかかわるものではなかった――ただ，その一端らしきものが表白された例としては，あのフランスの労働者たちの団欒を挙げることができよう。マルクスの言及は，むしろ次の点にかかわっている。つまり，個と個のありうべき関係行為は，どのような要件を充足すべきものか，ということである。アソシエーション社会では，もしくはアソシエーション関係行為においては，たとえば，「自分の素質をあらゆる側面で鍛える手段が実存」し，「人格的自由」が確保され，したがって「各人の自由な発展が万人の自由な発展のための条件である。」ところで，そのアソシエーション社会での諸個人の相互関係，そして個と社会との関係についてマルクスはどのように語っているか。関係行為のイメージは，assoziieren するという範疇をわざわざ用いることによって与えられているはずである。だが，個と個の関係行為の形態的特質は決して詳らかではない。個と社会との関係，その在りようについては，トータルには，公権力は政治的な性格を失う，と語られていた。これは国家の消滅と同義であろうか。あるいは，経済的な機能としては公権力的システム中枢は存在するというのか。存在するとすれば，個とそうした社会システムとの関係はどうなのか。また，いかなる形にせよ公権力は存在しないとすれば，マルクスの将来社会像を単なるユートピアンのそれから区別するものは何か。ともあれ，『共産党宣言』にあらわれるアソシエーション概念は，階

注(23) 1851年から1852年3月にかけて執筆。Werke, Bd. 8, S. 122.

(24) 現実の運動は，マルクスの目には，あまりにも未熟なものとして映っていた。したがって，彼は，革命運動の担い手たる労働者たちの組織のありようを追究しようとしている。なによりも労働者的運動への彼の関わり方をみれば，それが明らかであろう。とはいうものの，「世界の工場」たるイギリス，それも「市民社会の観察にとって有利な位置にあるロンドン」で生活することによって，彼の労働者的運動に関する展望も膨らんだに相違ない。早速，「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」紙への評論の中で，支配階級にとりこまれた「労働の組織」ではなくて「労働者階級の組織」を！と支援の言葉を労働運動に贈っている彼である（「労働議会の開会」1854年執筆，Werke, Bd. 10, S. 117 ff.）。また，チャーチストの新聞への寄稿の中で，「大ブリテン労働者たち」は，「近代工業の無尽蔵の生産諸力をつくりだすことによって，労働を解放する第一条件を達成した。労働者たちはいまやそのためのまた別な条件を実現しなければならない。こうした富を生産する力を，恥ずべき独占の手から解放し，生産者たちの共同の統制のもとにおかねばならない」（「労働議会にあてた手紙」1854年執筆，Werke, Bd. 10, S. 126）と述べている。

級社会にたいする単なる反対概念でしかない。とはいえ，一言つけくわえるならば，階級社会の反対概念である階級なき社会を「階級なき社会」と書きつけずに，わざわざ「協同連合社会」（アソシエーション）と書いたのである。マルクスにとって彼の将来社会ビジョンは，アソシエーション範疇ぬきにしては語りえなくなっていたに相違あるまい。このことを確認しておこう。

以上のような状況に比すれば，「経済学批判要綱」はマルクスの思うところをより直接に語ってくれている。この「要綱」では，マルクスのアソシエーション概念の射程が，たんなる体制論にとどまらず，個と社会との関係といういかなる体制にもおこりうる問題領域にとどいているのである。

マルクスの論旨を追跡すれば次のようになろう。

個と個の社会的関係が交換価値において表現されている社会，資本制社会においては，個々の活動がどのようなものであれ，またその所産がどのようなものであれ，個人の社会的な力，社会との関係は，個に対立する無縁にして物的なものとして表出する。たがいに無関心な（しかしたぶん共同性に飢えているであろう）個々人の衝突から生じて，個人に依存することなく存在する諸関係への，個人の従属である。それは，個人が相互に関係する行為として存在する諸関係では決してない。ただし，こうした物的依存性のうえでこそ人格的独立性は築かれることができ，また一般的な社会的物質代謝や，普遍的対外諸関係，全面的な欲求，そして普遍的な力能，といった人類史の最終段階への諸条件がつくりだされる。[25] このことをマルクスは忘れずに書きそえている。この人類史最後の段階は，「諸個人の普遍的な発展のうえに，また諸個人の社会的力能としての彼らの共同体的・社会的な生産性を従属させることのうえに築かれた自由な個性」[26] である。

この歴史認識にたったうえで，アソシエーション・イメージの模索にマルクスは入る。この最終段階の諸個人のおこなう「生産は，直接に社会的であり，相互に分業をおこなっている協同連合（Assoziation）の所産である」[27]。アソシエーションのもとでのこの諸個人は，「自分たちの外部に一つの宿命として存在する社会的生産のもとに包摂されている」わけではもはやなくて，社会的生産を自分たちの共有の力能として取扱う個人のもとに包摂しているのである。[28] 前述の「自由な個性」としての個人が社会もしくは社会機構とかかわり合う形態のイメージは，ゲルマン的所有の場合にもとめられているようだ。

たしかに，ゲルマン的共同体は「自然的」共同体ではあるものの，近代の歴史を批判するための

注(25) K. Marx, Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (Rohentwurf) 1857-1858, Dietz Verlag, Berlin, 1974, S. 75-76.（高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』第1分冊78-79頁，大月書店，1958年）以後，本文中では「要綱」，引用注では Grundrisse，『要綱』と略す。

(26) Grundrisse, S. 76（『要綱』第1分冊79頁）

(27) Grundrisse, S. 76（『要綱』第1分冊79頁）

(28) Grundrisse, S. 76（『要綱』第1分冊79-80頁）この命題は，『共産党宣言』におけるそれの再現になっている。また，この抽象的でしかないテーマは，すぐのちに生産協働組合の役割を承認するというかたちで，具体性を帯びることとなる。

視座を提供している，とマルクスは了解する。ゲルマン的共同体では，その構成員は都市に集住せず，[29] 個々の家族長が遠く道をへだてて森林のなかに定住していたという事情があるにせよ，また，ゲルマン人の統一原理が即自的に存在する統一でしかない（血統・言語・共通の歴史など）にしても，ゲルマン的共同体は，「構成員のその時々の連合（Vereinigung）によってのみ存在するだけだ。」[30] マルクスが評価するポイントはこの点にある。

したがって，

「（ゲルマン的……引用者）共同体は，連合体（Verein）としてではなくて，連合（Vereinigung）として現れ，統一体（Einheit）としてではなくて，土地所有者からなる自立的主体の統一（Einigung）として現れる。」[31]

これは，たんなる表現上のレトリックの問題ではない。マルクスは，社会（共同体）機構の柔軟性，個と社会（共同体）との関わり合いの回路が個の自由を活かす可能性を秘めていることをこそ評価しているのである。ちなみに，こうしたゲルマン的形態にあっては，「個体的土地所有は，共同体的土地所有の対立形態として現れることもないし，またその共同体によって媒介されたものとして現れることもなく，むしろ逆である。共同体は，これらの個体的土地所有者そのもの相互の交渉のうちにだけ存在する」[32] のだ，とマルクスは強調している。これらの引用文中の土地所有を所有で，共同体を社会でおきかえて読んでみよう。まさしく，[33] 所有関係をめぐっての個と社会との関わり合いについてのマルクス的ビジョンではないだろうか。この問題に彼がかかわりつづけていることは，個体的にして社会的な所有とか，個体的にして社会的な労働といった発想が彼の論述のそこかしこに顔をだしていることによっても明らかであろう。しかし，彼なりの解答に達したうえで答案を提するまでには至っていない。せいぜい，ゲルマン的な関係を参考資料として提出できたにすぎない，ということであろう。

しかしながら，こうした個と社会との関わり合いは頭の中に想定するだけでは再生不可能なことはもちろんで，できあがった社会的な力，社会的諸関係を部分的に改革することによっても不可能である。この点をマルクスは労働時間紙券の試みや，サン・シモニアンの企てをとりあげることによって明らかにしようとしている。

資本制生産様式にあっては，個人にとって社会的生産が自分たちの外部に一つの宿命として存在

注(29) 「農村生活の中心であり，農村労働者の居住地であり，同じく作戦用兵の中心地でもある都市での――このようなたんなる集合によって，共同体はそのものとして，いまや個々人の存在とはちがった外的存在となる。」Grundrisse, S. 382.（『要綱』第3分冊，1961年，415頁）

(30) Grundrisse, S. 382.（『要綱』第3分冊，416頁）

(31) Grundrisse. S. 383.（『要綱』第3分冊，416頁）

(32) Grundrisse, S, 384.（『要綱』第3分冊，417頁）

(33) ゲルマン的所有においては，「共同体所有が個体的所有の補完としてのみ現れる」（下線は引用者）わけで，この「個体的所有こそが，その（共同体的所有の……引用者）基礎であって，共同体の構成員の集会や共通の目的のための連合（Vereinigung）以外には対自的存在を決してもたないのである。」Grundrisse, S. 385.（『要綱』第3分冊，419頁）

していて，諸個人の共有の力能のもとに包摂されえぬままになっている。[34] したがって，

「交換価値，貨幣の基礎のうえに，連合した諸個人（vereinigten Individuen）による総生産の制御を前提することほど誤った愚かなことはない。[35]」

と舌鋒するどい批判が再登場するのである。また，

「交換価値に立脚した市民社会の内部には，この社会を爆破するためにちょうど入要な多さの地雷である交通諸関係および生産諸関係が生みだされる。〔社会的統一体の対立的な多くの諸形態。しかし，その対立的な性格は決して平穏な変態によっては爆破されえない。他方，もし今日あるがままの社会の中に，無階級社会のための物質的生産諸条件とそれに対応した交通諸関係とが隠されているのを見つけられないならば，どんな爆破の試みもすべてドン・キホーテ的愚行になるだろう。[36]〕」（下線は引用者）

こうした批判の延長線上で，マルクスのアソシエーション概念は，ふくらみをもたされるようになる。それには，経済学的思索の蓄積および深化が大いに関わっている。

まず第一には，「資本一般」を正面にすえて，資本の論理なるものを究明することにより，初めて提出されうる論定がある。すなわち，資本は自らのはらむ矛盾によって自家撞着するにいたり，したがって自らが歴史の通過点たることを示すのだ，とマルクスは断言するのである。来るべき社会の諸条件を資本制社会はそのうちに用意する，という命題の理論的開示の試みである。このことによって，頭の中だけの空論的な将来社会像「アソシエーション」を脱して，己がアソシエーションを措定する確信をえたに相違ない。〔また同時に，この点とのかかわりで注目すべきは，資本による所有の編成様式の究極のものとして株式会社が措定されていることである。〕第一の点と関連することだが，第二には，資本分析の一環として生産過程の考察（とりわけ機械装置と労働者という観点から）にたちいった彼が確認したのは，生産過程の労働者的制御が必然にして必須の条件であるということである。マルクスは，巨大な機械装置のもとでの労働がいかに無個性にして非人間的な労働に貶められるか，を強調するが，次のことを同時に論定していよう。機械装置（マルクスにとっては生産諸力の発展の象徴的・メルクマール的存在であった）の発展[37]——それは自働機械システムと想定された——とともに，生産過程を制御する体系が，機械装置の連動によって一つのトータルなシステムとして明示的に示されるということ（すくなくともマルクスはそう考えた）。つまり，ハード・ウエアにおける体系化と同時に，その制御のためのノウ・ハウも，情報として整序，確定化されるということ，である。したがって，そこに働く多数の労働者たちの手によって生産過程を制御するとい

注(34) Grundrisse, S. 76.（『要綱』第1分冊，79-80頁）
(35) Grundrisse, S. 76.（『要綱』第1分冊，80頁）
(36) Grundrisse, S. 77.（『要綱』第1分冊，80頁）
(37) 同時に，これも次節の論考の領分だが，こうした巨大な自働機械体系に代表される巨額の固定資本投資を担いうる資本形態として，株式会社が措定されている。

うことが，従前の工程とは異なり，飛躍的にその可能性を増すであろうと感覚したのである。ここにいたってマルクスは生産現場での労働者組織の真価を自己了解できるようになった。こうして彼独自のアソシエーションのための現実的なプログラムを策定するにあたって，生産協働組合を視野にいれることが可能となったのである。以上の2点について，しかし後者に比重をおいてさらなる追跡を試みよう。

「要綱」資本章内に記されたプランが「交換価値に立脚する生産様式と社会形態の解体」で締めくくられているのは，示唆的である。その簡単な内容解説として，マルクスは，「個体的労働を社会的労働として，またその反対に，現実的に措定すること」[38]（下線は引用者）と書き添えている。

この課題にそった論述を随所に残しているが，それらは単なる断片にとどまってはいない。すなわち，

「資本概念の厳密な展開が必要である。というのも，資本概念は近代の経済学の基本概念だからだ。それは，資本自体が，その抽象的模写が資本概念だが，市民社会の基礎であるのと同様である。」[39]

また，

「資本はたえず普遍性をもとめているが，この普遍性は資本自体の本性の中に制限を見つける。この制限は，資本自体がその発展の一定段階ではこの傾向の最大の制限となることを認識させ，したがって資本自体による資本の止揚へと追いやる」[40]

と，このように自己確認するマルクスは，その内容的な解説を試みていく。

まず，いわば有機体として，運動しつづけるものとしての資本，流通するものとしての資本に着目した把握において，

資本が発達すればするほど，交通の場所的制限をとりはらおうとし，他方では，その空間利用に要する時間を削減しようとする。「ここに資本をすべての先行する生産諸階級から区別する資本の普遍的傾向が現れている。……資本は生産諸力の普遍的発展につとめ，かくて新しい生産様式の前提となる。この新しい生産様式は，……生産諸力自体の自由な，さまたげられない，前進的・普遍的発展が，社会と，したがってその再生産との前提であるようなところに基礎をおいている。」[41]

これが生産過程分析におりてくると，資本制生産様式の止揚を論じるマルクスの筆は，まさしく資本と労働との問題にかかわって，俄然いきおいづいてくる。

「資本は，その意に反して，社会の自由に処分できる時間という手段を創造し，その結果として

注(38) Grundrisse, S. 175.（『要綱』第2分冊，1959年，185頁）
(39) Grundrisse, S. 237.（『要綱』第2分冊，252頁）
(40) Grundrisse, S. 313-314.（『要綱』第2分冊，338頁）
(41) Grundrisse, S. 438.（『要綱』第3分冊，476-477頁）

社会全体のための労働時間を低落的最低限にひきさげ，かくして万人の時間を万人の発展のために解放するのに役立つ。……資本が，それ（自由に処分できる時間の創造……引用者）に成功すると，資本は剰余生産になやみ，その場合には必要労働が中断される。……こうした矛盾が発展すればするほど，生産諸力の発達はもはや他人剰余労働の領有に縛りつけられてはいられないし，労働者大衆自身が自分たちの剰余労働を領有せねばならないということが，ますます明らかになる。」[42]

（下線は引用者）

しかしながら，こうした歴史的役回りを演ずべき労働者たちにとって，現実の労働は，それ自体すでに資本に合体せしめられていて，資本の一契機としてしか存在しえない。資本の生産過程においては，労働は「一つの総体——諸労働の結合体（Kombination）」[43] である。この結合労働（組み合せられた労働）こそ，資本制生産諸力の源である。しかし，その結合は，個人にとっては即自的な結合でしかない。個々の労働主体は，互いに無縁な労働者でしかなく，したがってその結合は，生産過程で「共に働いている個人の相互関係行為としてのそれ」では決してない。この結合における労働者たちの精神的な統一は，自分自身のものではなくて，資本の意思と知能とに依拠するかたちで，資本によって支配された統一でしかない。労働者たちにとって外的なものでしかありえないのである。また，結合労働の物的統一も，「機械装置，固定資本という対象的統一体に従属する」[44] という具合に表れるいがいにない。労働はたんなる組合せられた労働でしかなくて，その生産物と同様に，「特殊な，個別的な労働者の労働として否定されている。」[45]

しかし，こうしたかたちでの生産も，前に述べたように，全面的欲求，普遍的力能を内包した社会的個人の豊かな発達をともなうことになる。したがってまた機械装置の，もしくは固定資本の巨大化に表示される科学の力の著しい発達。労働者は，抑制され，片端にされるが，その反面において，自由に処分できる時間を領有すべき自由な個人として，蘇生への道を歩みはじめるのである。かくして，組合せられた諸個人の協同連合した諸個人（associerte Individuen）への転化——この転化への通過点，転換点として，生産過程の労働者による掌握と制御という課題が浮上してくる。「機械が協同連合した諸個人の所有に帰し」[46] てこそ，社会的生産が協同連合（Association）の所産としてあらわれることになるのである。ただし，そのためには，何よりも現実の中で労働者相互の自由な関係行為の回復を獲得していく試みが積み重ねられねばならない。労働組合，そして生産協

注(42) Grundrisse, S. 595-596.（『要綱』第3分冊，657頁）

(43) Grundrisse, S. 374.（『要綱』第3分冊，406頁）

(44) Grundrisse, S. 374.（『要綱』第3分冊，406頁）この意味で，「資本は社会的労働の定在——主体ならびに客体としての労働の結合」（Grundrisse, S. 374.（『要綱』第3分冊，407頁），といえる。かくして，まさに「資本は絶対的にすでにひとつの社会的な（sozial），組み合わせられた力である」というわけである（Grundrisse, S. 427. 草稿原注（『要綱』第3分冊，465頁））。

(45) Grundrisse, S. 374.（『要綱』第3分冊，406頁）

(46) Grundrisse, S. 717.（『要綱』第4分冊，1962年，796頁）

働組合運動へのマルクスの取り組みは，いよいよ本格化することになる。

しかしながら，それは「要綱」での取り扱いにも増して豊富な内容をもって，ということではない。かつてはあったあの抑制がなくなって，逡巡することなくアソシエーション範疇を用いるようになる，というほどの意味である。それにしても，次項でみる60年代のアソシエーション範疇は，「要綱」においてマルクスが取り組みつづけた課題の一つ——個と社会——を引き受けるに相応しい内容をもった文脈に登場するのだろうか。個体的にして社会的，個体相互の関係行為のうちにだけ存在するような社会，個人の自由を高め，個人の諸活動一切の可能性をのばすように作用しうるシステムをもつ社会。このような社会の像をさらに鮮明にするかたちで，この範疇は登場してくるのだろうか。なるほどアソシエーション範疇を冠した組織形態として協働組合と株式会社が登場するのをわれわれは知る。しかし，それらの2形態がなにゆえにそのように扱われるのか，決して多くが語られるわけではない。〔以下次号〕

18ページの補注（＊）そもそも本稿のテーマは，マルクスによる株式会社の取り扱い方を点検する作業の一環として設定された。したがって本稿の論述，論及は限界を孕んでいる。労働運動史上の具体的諸事実，および社会思想史上の論点に深く立ち入ることを避けている。本稿のテーマ設定に際して対象をマルクスそのものに絞りこんだのは，まずもってマルクスのいわんとしたことを交通整理しておきたかったからである。ゆえに私の回避は確信犯のそれであった。

この点に関して，本学の飯田鼎教授・野地洋行教授から丁重なコメントを頂戴した。慎んで承り，この場を借りてお礼申し上げたい。

（慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程）